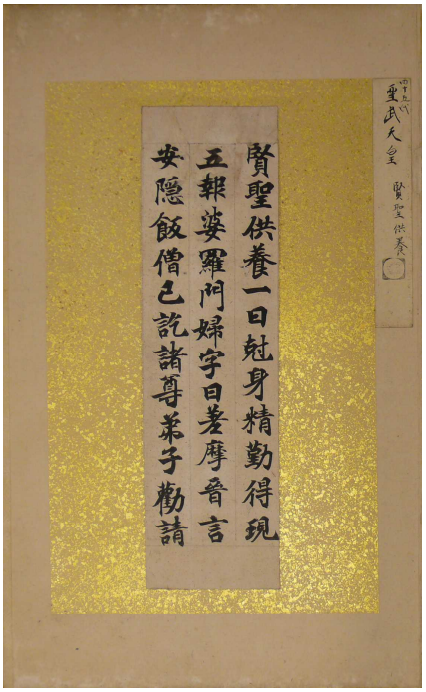
鶴見大学創立50周年・鶴見大学短期大学部創立60周年記念

第135回鶴見大学図書館貴重書展

風格の古筆手鑑　深奥なる古筆切



2013年10月4日(金)～10月27(日)

鶴見大学日本文学会・鶴見大学ドキュメンテーション学会　共催

ご挨拶

古筆手鑑とは、ほぼ奈良時代から室町時代までの古写本を、主に鑑賞目的で分割した古筆切（断簡）や、短冊などを、たくさんの数・たくさんの種類貼り集めたアルバムです。

このたび本学図書館に、江戸時代に製作された古筆手鑑１帖が、新たに収蔵されました。美術品・文化財としての価値はもちろんのこと、とりわけ日本古典文学研究に関わる重要資料・新出資料が数多く含まれた、よそではちょっとお目にかかりにくいレベルの逸品です。ちょうど本学創立50周年・本学短期大学部創立60周年という喜ばしい年でもありますので、寿ぎの念をも込めて、お披露目展示をいたします。

その際、せっかくの周年ですので、まずは本学にゆかりの深い、曹洞宗高祖・道元禅師の自筆断簡・道正庵切にご登場願った上で、新収手鑑所収断簡にさまざまな形で関わってくる、本学図書館蔵の古典籍・古筆切をも併せて陳列いたします。展示ケースの都合上、古筆手鑑は（展示替えしても）一部分しか拡げることができません。が、その代わり、各陳列品の傍らに、関連する手鑑所収断簡の図版を並べ、さらに手鑑全丁のカラー図版を収めたファイルをもご用意いたしますので、ぜひともそれらをご覧になって、新収手鑑の風格や、各断簡の文化的・学術的な意義、またその深奥さをご堪能いただければと存じます。

※前期（～10月16日（木））・後期（10月17日（金）～）で一部展示替えがあります。
※見出し末尾に＊を付したものは、本学教員の所蔵品です。
※本解題の文責は、久保木秀夫（ドキュメンテーション学科准教授）にあります。

（2013年10月3日第3稿）

展示リスト

1　古筆手鑑　折帖1帖　江戸時代製作／奈良～江戸時代写・367点貼付
2　道元筆　道正庵切　『対大己五夏闍梨法』断簡　額装2葉
3　伝聖武天皇筆　大和切（大聖武）　『賢愚経』断簡　奈良時代写　額装1葉
4　伏見院筆　筑後切　『拾遺集』断簡　鎌倉時代後期写　軸装1幅
5　伝後宇多院筆　松木切　『兼行集』断簡　鎌倉時代後期写　軸装1幅
6　伝伏見院筆（尊円親王筆）　『風雅集』断簡　南北朝時代写　台紙貼2葉
7　後崇光院筆　名所百首和歌　室町時代初期写　巻子本1軸
8　伝寂然筆　大富切　『具平親王集』断簡　平安時代末期写　マクリ1葉＊（前期）
9　伝寂然筆・藤原定家加筆　村雲切　『貫之集』断簡　平安時代末期写　台紙貼6葉のうち
　②「はなのいろは～」⑤「はることに～」（前期）
　①「やまさくら～」④「つまこふる～」⑥「ちよとおもふ～」（後期）
10　伝寿暁筆　『顕注密勘』断簡　南北朝～室町時代初期写　折帖1帖　11葉貼付
11　伝寿暁筆　『古今集』断簡　南北朝～室町時代初期写　台紙貼1葉（前期出展）
12　伝平業兼筆　春日切　『師輔集』断簡　平安時代末期写　1幅
13　藤原定家筆　大記録切　『明月記』断簡　鎌倉時代写　軸装1幅
14　伝二条為氏筆　『家隆卿集』断簡　鎌倉時代中期写　マクリ1葉＊
15　伝飛鳥井雅康筆　『新勅撰集』　室町時代後期写　列帖装2帖
16　伝飛鳥井雅俊筆　『伊勢物語』　室町時代後期写　列帖装１帖
17　上杉鷹山手沢　『新古今集』　室町時代中期写　袋綴４冊
18　伝下冷泉持為筆　『新古今集』　室町時代後期写　巻子本２軸

1　古筆手鑑　折帖1帖　江戸時代製作／奈良～江戸時代写・367点貼付

金茶地に唐花唐草瑞鳥文様織り出し緞子表紙。中央に「古筆手鑑」と墨書した雲紙金龍欄紋金野毛砂子散らし題簽貼付。縦39・7㎝×横24・3㎝×高さ13・0㎝。全45折、オモテ・ウラ合わせて90面。植物・雲霞・遠山・飛鳥等の大和絵を描いた見返しに続き、3行の大聖武（解題3参照）を筆頭に、表裏合わせて古筆切類144点・短冊216点・色紙7点の、合計367点を貼付している。うちオモテ面20点目の書状断簡に「仙洞様寛文頃〈しん上候披露／御消息切〉（「琴山」印）とする古筆本家２代了栄の極札が付属している。これは後水尾院を指すようであるが、「寛文頃」とある以上、少なくともこの1葉が貼付されたのは寛文年間（1661～1673）以降となろう。また今後、その他の極札類の精査によって、当該手鑑が一体いつ頃、現状のような内容となったのか、ある程度絞り込むことも可能となろう。

なお本解題では取り上げられなかったが、当該手鑑にはほかにも、『源氏物語』桐壺巻末・一条兼良による花押入り識語部分の断簡（表紙図版参照）や、伝二条為氏筆『俊頼髄脳』断簡、伝慶運筆松梅院切『続三百三十三首和歌（中院亭千首題）』断簡（解題末尾図版参照）など、重要・稀覯資料が多数収められている。

2　道元筆　道正庵切（どうしようあんぎれ）　『対大己五夏闍梨法（たいたいこごげじやりほう）』断簡　額装2葉

曹洞宗高祖たる道元の、自著の自筆原本の断簡という、貴重極まりない逸品。安政5年（1858）刊『増補新撰古筆名葉集』「道元禅師」の項に「道正庵切　四半、白紙、白罫、正法眼蔵、片カナ交リノ処モアリ」とある名物切。ただし書写内容は『正法眼蔵』ではなく、道元が寛元2年（1244）に著した、出家得度後5年以上の阿闍梨（五夏闍梨）という長上者（大己）に対しての初学者の作法を説いた、『対大己五夏闍梨法』なる書物――禅宗の規範を定めたいわゆる『永平大清規（しんぎ）』6編のうちの1編――である。

もと粘葉装（でつちようそう）。従来知られていたツレは、MOA美術館蔵手鑑『翰墨城』に第13条の1行分、京都国立博物館蔵手鑑『藻塩草』に第21～24条の1面分、出光美術館蔵手鑑『見ぬ世の友』に奥書部分の1面＋2行分（ただし最終行「道元（花押）」の筆致筆勢のみにはいささか違和感あるとのこと、これは本学高田信敬教授の意見）という国宝手鑑所収の3葉と、田中塊堂編『都地久連』所収（現・個人蔵）の第40～41条の2行分1葉の、合計4葉のみだった。

そこに本学図書館蔵の2葉が加わったのである。すなわち①縦23・9㎝×横14・4㎝、空押しの界罫18・0㎝×1・8㎝。第25～28条。『藻塩草』断簡のまさしくウラ面に該当。本学図書館収蔵当時、「国宝に「裏」があった」（読売新聞・1986年10月21日刊）等々と、大々的に新聞報道された1葉である。②縦23・2㎝×横12・7㎝（周囲がやや裁ち落とされている）、空押しの界罫18・0㎝×1・8㎝。第60～62条の本文最末部分。これも典籍時のウラ面だったとみられ、それに続けて『見ぬ世の友』断簡の、今は剥がされているオモテ面が糊付けされていたとおぼしい。本学図書館収蔵に至った経緯と、道正庵切そのものの意義と、より的確な書誌解題については、池田利夫氏「道元自筆『対大己法』断簡の新出、また新出」（『かたい話てんでん』所収、2002年）、及び『鶴見大学蔵貴重書展解説図録　古典籍と古筆切』（1994年、鶴見大学）などを参照。

また①糊代部分の「第二」という注記によって、『永平大清規』流布本たる寛文7年（1667）版本における6編の、成立年次不順の配列とは異なり、かつて道元が成立順に、当該『対大己五夏闍梨法』を正しく「第二」番目に編成した写本を、自ら清書していたと明らかになること、高田信敬氏「道元自筆「道正庵切」余説」（『鶴見日本文学会報』34、1994年）に詳しい。

なお現時点で未紹介のツレとして、個人蔵手鑑所収・第29～32条の1面分（これは①に直続しよう）、松下幸之助旧蔵手鑑『隠心帖』所収・第50～54条の1面分の2葉の存在が知られる。

3　伝聖武天皇筆　大和切（大聖武（おおじようむ））　『賢愚経』断簡　奈良時代写　額装1葉

古筆切の代表格と言ってよい名物中の名物。通常の写経は1行17字詰めを基本とするが、この『賢愚経』の写本は重厚雄大な文字で1行12字詰めとする。『増補新撰古筆名葉集』「聖武天皇」の項に「大和切　大字、カラ紙、胡粉地、経墨卦、墨字、大聖武ト云、紙、白・浅黄・茶・ウス紅等アリ」とある。大和切と呼ばれているのは、もと東大寺に伝来していたためとみられる。またその大振りな文字と、伝称筆者とを合わせて、大聖武とも呼ばれるようになったのだろう。尊経閣文庫蔵残簡の識語によって、永正9年（1512）にはすでに分割され始めていたことが知られる。

当該断簡は巻第九「善事太子入海品第三十七」のうちの3行分を書写。縦27・4㎝×横7・9㎝、墨界高23・2㎝×罫幅2・6㎝。料紙は仏舎利（実際は香木とのこと）を漉き込んだと言われる茶毘紙（だびし）。当該断簡1行目の破損部分には「如喪父」という文字が入る。第一級の手鑑では、この大聖武をオモテ面の一番最初に貼ることを常としている。

さて**新収手鑑のオモテ面冒頭にも、大聖武1葉が貼付**されている。軸装断簡と同じく3行分で、縦27・7㎝×横7・8㎝、界高23.1㎝×罫幅2・5㎝。「差摩現報品第十九」の一部分。保存状態極めて良好。この1面に大聖武のみを貼り、金砂子散らし料紙で周囲を装飾しているのも、その存在感を際立たせている。これによって新収手鑑の格も自ずと保証されるという次第である。

4　伏見院筆　筑後切　『拾遺集』断簡　鎌倉時代後期写　軸装1幅

『増補新撰古筆名葉集』「伏見院」の項に「筑後切　雲紙、巻物、後撰・拾遺ノ哥三行或ハチラシ、金銀砂子紙モアリ」とある名物切。すなわち伏見院宸筆による元巻子本の三代集（『後撰集』『拾遺集』のみならず『古今集』の断簡も見出されている）を分割したものである。当該断簡は、うち『拾遺集』の一部分で、巻二十・哀傷・1311番歌に該当。縦28・0㎝×9・0㎝の雲紙料紙。歌1首3行書で、端正にゆったり書写しているのが特徴。

一方、**新収手鑑にも**、巻十九・雑恋の巻頭1210番歌を書写した**筑後切6行分の1葉が貼付**されている。巻頭部分の断簡というのは、言うまでもなく数が限られているから、それだけで価値が一気に高まりもする。縦28・1 ㎝×横15・7㎝の雲紙料紙。軸装断簡に較べると書式が異なり、一見ツレではないような印象も受けるが、料紙の寸法や種別は一致する。前掲『古筆名葉集』に「三行或ハチラシ」とあり、実際『古筆学大成8』所収のツレを通覧してみても、まさに書式や書風はさまざまであるから、同一典籍の中で、伏見院が、多様な書式・書風を自在に使いこなしつつ、『拾遺集』を書写していたということだろう。

なお書写されている本文の親本が、『拾遺集』現存伝本中では珍しい、定家の貞応元年（1232）九月本であることについては、杉谷寿郎氏「拾遺集定家貞応元年九月七日書写本考」（『語文』78、1990年）を、また筑後切の紙背に摺経が存する場合のあること、かつそれを含めた筑後切自体の意義については、石澤一志氏「伏見天皇筆「筑後切」」（『平安文学の新研究』所収、2006年、新典社）を、それぞれ参照のこと。

5　伝後宇多院筆　松木切　『兼行集（かねゆき）』断簡　鎌倉時代後期写　軸装1幅

松木切は、『増補新撰古筆名葉集』「後宇多院」の項においては「奉書紙、御自詠哥、一行、カタカナニテ題アリ」と、伝称筆者たる後宇多院の「御自詠哥」を書写したものとされている。が、実際は『兼行集』や『為子集』、また伏見院の詠草、あるいは歌人未詳の詠草といった、初期京極派歌人複数の家集・詠草を分割したものである。

当該断簡はそれらのうち『兼行集』の断簡で、8～10番歌に該当。縦30・8㎝×横13・8㎝。上句の字高

24～25㎝前後。国宝手鑑『翰墨城』『藻塩草』などにツレが貼付されている。鎌倉時代後期頃という書写年代、及び2行目末尾（8番歌第3句）の修正痕（「木すゑより」→「木すゑこそ」）などからして、現存『兼行集』の原本であると目されている。また本文の筆者は伏見院だった可能性もあるという。石澤一志氏「伝後宇多天皇筆「松木切」〈『兼行集』断簡〉について」（『和歌文学研究』76、1998）、別府節子氏「松木切の考察」（『出光美術館研究紀要』3、1997）などを参照。

一方、**新収手鑑にも後宇多院を伝称筆者とする歌集断簡が貼付**されている。鎌倉時代後期写にして、縦32・8㎝×横6・0㎝と、書写年代や料紙寸法は軸装断簡と一致するが、上句の字高は26・5㎝とかなり差があり、歌題の位置なども異なる。また書写内容も出典未詳の歌1首分であるので、まず『兼行集』のツレということにはならない。ただし筆蹟は両者通じるところがあるようにも見え、また手鑑所収断簡下句「なをすゑくらし」といった表現が京極派和歌の特徴に通じているようでもある。その点、あるいは同時期における別の京極派歌人の家集・詠草の一部であって、やはりこの断簡も松木切の一種と認め得る余地があるかもしれない。ツレの博捜が課題であろう。

6　伝伏見院筆（尊円親王筆）　『風雅集』断簡　南北朝時代写　台紙貼2葉

第17番目の勅撰集『風雅和歌集』に関しては、「竟宴本」とも「奏覧正本」とも呼ばれる成立時の原本、もしくはそれに極めて近い残簡・断簡が複数種類伝わっている。すなわち真名序2種（うち1種は書き損じの由）、巻一・春上・巻末部分の残簡、巻八・冬部の断簡、巻十七・雑下の断簡、などである。いずれも元巻子本で、『風雅集』正本の清書者たる尊円親王の自筆とみられているが、伏見院・後伏見院など、異なる伝称筆者名が付されていることもある。

当該断簡2葉はいずれも、上記のうち巻八・冬部の雲紙料紙の断簡で、伝称筆者は伏見院。①縦26・8㎝×横11・7㎝、上句の字高24・3㎝前後。726～727番歌。②縦27・0㎝×横12・0㎝、字高同前。728～729番歌。すなわち内容的に連続する2葉であり、確かに雲紙の雲もほぼ繋がっているようである。ほかにツレ2葉の存在が指摘されている。石澤一志氏「尊円親王筆『風雅和歌集』奏覧正本の断簡」（『国文鶴見』37、2003年）参照。

一方、**新収手鑑にも**、「尊円（「琴山」印）」という古筆本家初代了佐の極札（しかも雲紙に金で装飾を施した大変豪華なもの）とともに、やはり**尊円自筆と認められる『風雅集』断簡1葉が貼付**されている。縦28・0㎝×横14・1㎝、上句の字高22・0㎝前後。巻一・春上・50～51。前述のように、既知の分には巻一巻末部分の残簡（83～90番歌、『日本古典文学影印叢刊24　風雅和歌集』所収、1984年、貴重本刊行会）がある。縦27・5㎝、雲紙料紙3枚継ぎの巻子本。その末尾に「此第一巻、去年十一月五日書進仙洞、同九日竟宴之時、被披講了、而少々被添削之上、料帋下品之間、重加清書、仍返賜此本者也、貞和三年六月廿日記之／伝領臨池不才（花押）」という識語が存する。当該残簡はまさしくこの残簡のツレと判断されるので、貞和2年（1346）11月9日竟宴時の伝本そのものということになる。完全新出という点からしても、極めて貴重な1葉である。

ところで竟宴の段階で書写されていたのは真名序・仮名序・巻一・春上のみであり、そのうちの巻一も、前掲識語によれば、のちに清書し直されたという。巻一断簡と、巻八断簡との字高に違いがあるのも、そのような成立・書写事情を反映してのことであろうか。

なお尊円自筆『風雅集』断簡には、雲紙ではなく素紙のものもあり、これまでに3葉報告されている。実はそのうちの1葉（佐々木孝浩氏ほか編『日本の書と紙　古筆手鑑『かたばみ帖』の世界』所収、2012年）の書写内容（巻一・春上・50～51）が、このたび新出した手鑑所収断簡と完全に一致し、のみならず筆致・書式も、極めて酷似しているのである（大垣博氏によるご教示。本解題執筆者は、同書編纂に関わったにも関わらず、うかつにも気づいていなかった）。ただし漢字・仮名の別や字母などにはそれなりの異同が存

するので、親本・模写本といった単純な関係ではなさそうであり、同じ尊円によって異なる機会に複数の伝本が書写されていたとみるべきか。そうだったとしても、しかし今回のようにまったく同じ本文部分が分割され、そのいずれもが現存しているというのは、やや出来過ぎのようでもあろう。このように尊円筆『風雅集』残簡・断簡をめぐっては、資料が現れるたびに謎もどんどん増えていき、興味が尽きない。

7　後崇光院筆　名所百首和歌　室町時代初期写　巻子本1軸

後崇光院（貞成親王）自筆自詠の百首歌。他に伝本のない天下の孤本。元袋綴本の巻子改装で、後補の緞子表紙に、縦26・6㎝×横平均40㎝（中央に袋綴時の折り目あり）の料紙9枚継ぎ。かつて綴じ穴が存していたはずの部分は裁ち落とされているので、元1面分は横21㎝程度だったとおぼしい。なお1枚目の折り目右側は横9・2㎝分しか残っていない（つまり他の面と較べて12㎝ほど短い）。また9枚目の折り目左側も同様に、横11・5㎝分しか残っていない（やはり他の面と較べて10㎝ほど短い）。9枚目のあとに横4・1㎝の別紙を継ぎ、「名所百首之和歌巻物者、後崇光院真翰也　古筆了仲証之畢（「守村」印）」と書写、かつ紙継ぎ部分に「鑑定家」の合縫朱印を捺している。

内題「詠名所百首和歌」、その右肩に朱合点。また次行「春」という部立に続けて「四辻入道左府」すなわち四辻善成の「点」があるという、本文同筆の注記が加えられている。石澤一志氏「鶴見大学図書館蔵『後崇光院名所百首和歌』（応永四年）」（『国文鶴見』43、2009年）では、所収歌の一部が『菊葉集』に「応永四年名所百首歌」として見られること、また全文一筆であることなどから「応永四年（一三九七）、親王二六歳の時に詠まれたもの」で、「善成により合点・評語を付された草稿・添削本があり、それをもとに、後崇光院が転写・清書したものが本書」であることや、「『菊葉和歌集』の撰集資料」など「折に触れて利用されていたこと」などが指摘されている。

付言すれば、もし当該本が本来これだけで独立していたとすれば、たった9丁の袋綴じ本だったことになる。おそらくそうではないのであって、後崇光院の、今日伝わる『沙玉和歌集』3種とはまた別種の、散佚したとある家集類の一部分だったとみるべきではなかろうか。前述した1枚目折り目右側、及び9枚目折り目左側の各寸法が短いというのも、本来そこには別の歌群の末尾なり冒頭なりが書写されていたためではないかと推定される。なお小林強氏によって紹介された、『沙玉和歌集』別本とされる自筆断簡（村上翠亭氏・高城弘一氏監修『古筆鑑定必携』所収、2004年、淡交社）や、別府節子氏「自筆自詠の和歌資料を中心とした中世古筆資料」（『出光美術館研究紀要』16、2010年）において紹介された、自筆『後崇光院集』断簡とはいずれも別種。

一方、**新収手鑑にも、後崇光院の真筆とみられる未詳絵詞の断簡1葉が貼付**されている。縦27・7㎝×横12・0㎝＋補紙6・5㎝。翻刻は次のとおり。

夢のさめおはりぬ
　　絵
同五月比このおもむきをもちて当社奉行
蔵人大輔仲兼につきて奏聞をへておなし
九月五日より社殿をひらきたてまつりて

ツレは現時点では見出せていない。1行目に「夢のさめおはりぬ」、3行目に「当社」、5行目に「社殿」とあり、2行目に「絵」などとある点、某社にまつわる霊験などを描いた縁起絵巻の詞書部分を転写したものであったか。4行目「蔵人大夫仲兼」は平仲兼（1248生～1305出家、ちなみに『日吉山王利生記』に登場する「近江守仲兼」とは別人）であろう。『看聞日記』紙背の後崇光院筆「諸物語目録」に記載されている物語類のいずれかに該当する可能性もあるかもしれない。出典にお心当たりのある方は、ぜひともご教示願いたい。

8　伝寂然筆　大富切（おおとみぎれ）　『具平親王集（ともひら）』断簡　平安時代末期写　マクリ1葉＊

『増補新撰古筆名葉集』「寂然」の項に「色紙形　哥チラシ書、砂子紙・白紙」とあるものに該当。縦14・2㎝×横14・8㎝、金銀箔砂子散らしの斐紙。出光美術館蔵の国宝手鑑『見ぬ世の友』所収断簡の付属紙片により、大富切とも呼ばれている。完本としては現存しない散佚『具平親王集』の本文を、部分的ながらも今日に伝える極めて貴重な資料である。田中親美旧蔵残簡の識語により、平安時代末期の歌僧にしていわゆる大原（常磐）三寂の一人、寂然の「唯心房〈寂然壱岐守頼業〉少年之時狂手跡也」にして、藤原定家の所持本だった可能性の極めて高いことが知られる。またこの金銀箔散らし料紙のマクリ断簡の精査によって、そこに記載されている1首が『新古今集』巻八・哀傷・855番歌と一致すること、かつおそらくはその直接の出典となった（すなわち当該断簡が『新古今集』の撰集資料そのものだった）とおぼしきこと、『具平親王集』の成立がほぼ間違いなく親王没後の寛弘6年（1009）7月以降だっただろうこと、また配列も詠作年次順ではなかったはずであること、なども知られる。久保木秀夫「具平親王集」（『中古中世散佚歌集研究』所収、2009年、青簡舎）など参照。

一方、**新収手鑑にもこの大富切のツレ1葉が貼付**されている。縦15・7㎝×横13.5㎝。すでに『古筆学大成19』にも掲載されているもので、「女御殿」（特定不能か）と「宮」（具平親王）との贈答歌。具平親王を「宮」と呼び、その歌を「御返事」としている点も、この『具平親王集』が親王以外の手に成る他撰家集だったことを物語っていよう。

9　伝寂然筆・藤原定家加筆　村雲切　『貫之集』断簡　平安時代末期写　台紙貼6葉のうち

前掲大富切の縁で陳列。『増補新撰古筆名葉集』「寂然」の項に「村雲切　小六半、砂子紙、哥仙家集、哥二行書、定家卿ノ加筆アリ」とある名物切。いくつかの状況証拠から、寂然の真筆である可能性が高いとみられる。とすれば、大富切とも同筆ということになるが、いかがであろうか。

またツレによっては夥しく書き入れられている「加筆」が「定家卿」によるものだったという点についても、それら加筆の筆蹟の特徴に加え、村雲切のまとまった残簡が冷泉家時雨亭文庫から出現した（すなわち冷泉家伝来だったとおぼしき）ことなどから、確かにそうだった可能性が極めて高そうである。

料紙に散らされた銀砂子が相当に酸化しているため、特にこの加筆部分の判読が困難となっているのが難点であるが、『古筆学大成18』には相当数のツレが掲載されており、かつ翻刻も備わっている（もちろん批判的な確認・点検は必須）。村雲切は歌仙家集本・陽明文庫本といったいわゆる第一類の祖本と目されながら、村雲切それ自体の研究は決して進んでいるとは言い難い現状、まずは同書を基本台帳として再調査し直されるべきであろう。そもそも『貫之集』は平安～鎌倉時代写の古写本・古筆切に恵まれていながらも、本文が錯綜しており、今後あらためての徹底的な研究が不可欠である。なお田中登氏「貫之集伝本研究の現段階」（『和歌史論叢』所収、2000年）などを参照のこと。

さて本学図書館には、村雲切が6葉も蔵されている。これは冷泉家時雨亭文庫蔵の残簡を除けば、他に例を見ない最大のまとまりであろう。それぞれの寸法・内容は次のとおり（引用本文は、最初に詞書がある場合も、それを飛ばした一番最初の記載歌の初句）。

①「やまさくら～」縦16・6㎝×横10・6㎝／61～62番歌
②「はなのいろは～」縦16・7㎝×横11・0㎝／110～111番歌
③「さをしかの～」縦16・5㎝×横2・9㎝＋補紙3・6㎝／582番歌
④「つまこふる～」縦16・9㎝×横13·2㎝／614～617番歌
⑤「はることに～」縦16・6㎝×横12・3㎝／687～688番歌
⑥「ちよとおもふ～」縦16・7㎝×横12・2㎝／右から7・9㎝の位置に紙継ぎあり／784～785番歌

10　伝寿暁筆　『顕注密勘』断簡　南北朝～室町時代初期写　折帖1帖　11葉貼付

顕昭『古今秘注抄』に定家が自説を加えた『古今集』の注釈書『顕注密勘』を分割したもの。伝称筆者の寿暁は『新後撰集』初出の勅撰集歌人。津守氏であったらしいこと以外は伝未詳。当該断簡については、海野圭介氏「『顕注密勘』古筆資料の検討」（『古代中世文学研究論集　第2集』所収、1999年、和泉書院）において最初に5葉集成され、次いで小林強氏・高城弘一氏『古筆切研究　第1集』（2000年、思文閣出版）及び『日本の書と紙　古筆手鑑『かたばみ帖』の世界』（前掲）において1葉ずつ紹介された。

その新出のツレを、本学図書館は11葉も所蔵していたのであった（本解題執筆者も今回初めて知り、驚いた）。新調した折帖のオモテ面に全葉を貼付。1葉ほぼ17・0㎝×13・5センチ程度。書写内容は、①巻一・春上・51・55番歌、②56・58番歌、③58・59番歌、④61番歌、⑤巻二・春下・巻頭69番歌、⑥72・73番歌、⑦73番歌、⑧77番歌、⑨77番歌（⑧と元見開きの状態で本文連続）、⑩111番歌、⑪126番歌、となっている。

さらに**新収手鑑にも、これら伝寿暁筆『顕注密勘』断簡のツレ1葉**が貼付されていた。縦17.0㎝×横13.1㎝。巻一・春上・47・50・51番歌に該当。

海野氏が調査した5葉の範囲では「特徴的な異文などは認められず、概ね通行本本文に一致する」とのことであった。ところが本学図書館所蔵の合計12葉の本文中からは、日本歌学大系本と比較してみる限りにおいても、相応の異同が見出されるようである。とりわけ⑧では、密勘部分が歌学大系本とは異なり、頭注として「又秋風松ヲ払テゾヰニオツ童部ナトノ墻ノソヒ二雀ノヰタルナト申詞トカヤ松ノミナトノヲツル二ヤ」と書写されている。77番歌のこの密勘部分については、密勘そのものを持たない永青文庫本があったり、冒頭に「裏書云」と付す国文学研究資料館初雁文庫本などがあったり、あるいは「此注、萩原殿御本にはかしらかき（頭書）にす」と注記する中央大学本があったりと、伝本間における大きな本文異同のひとつとして、従来注意されてきた箇所である。海野氏「顕注密勘伝本考」（『古代中世文学論集　第一集』所収、1996年、和泉書院）など参照のこと。

ちなみに、もう言うまでもなかろうが、⑧の在り方は、中央大学本に校合された「萩原殿御本」のそれに符合しており、頗る注目されるのである。このように本学図書館蔵12葉の資料的価値は非常に高く、断簡をあらためて集成し直した上での再精査が必須であろう。

11　伝寿暁筆　『古今集』断簡　南北朝～室町時代初期写　台紙貼1葉（前期出展）

前掲『顕注密勘』断簡の縁で陳列。『増補新撰古筆名葉集』「寿暁」の項に「四半　古今、哥二行書」とあるものに該当。川上新一郎氏「清輔本古今集考補遺」（『斯道文庫論集』32、1998年）において17葉集成されており、定家本の本文に、清輔本の勘物や、内閣文庫蔵『古今和歌集註』と一致する注記が書き入れられたものであること、また前掲『顕注密勘』断簡と同筆であること、などが指摘されている。

当該断簡はその新出の1葉。縦25・5㎝×横16・7cm。巻一・春上・15～18番歌に該当。左余白・行間にびっしりと書き込まれた注は『伊勢物語』12段の引用で、確かに清輔本のうち保元二年本の勘物と（小異はあるものの）一致している。

12　伝平業兼（なりかね）筆　春日切　『師輔集』断簡　平安時代末期写　1幅

春日切は『増補新撰古筆名葉集』「平業兼」の項に「春日切　六半、花山院御集カ、未詳、哥三行書、白卦アリ」とある名物切。『師輔集』『実頼集』などの私家集数種を書写した、もと粘葉装の冊子本を分割した

もの。早く『古筆名葉集』が指摘していたとおり、中に散佚『花山院御集』の一部分が含まれているなど、資料的価値が極めて高い。ちなみに伝称筆者の業兼は、本文の筆者ではなく、既存の本文に校合を加えた人物であることが明らかにされている。

当該断簡（①とする）は『師輔集』の一部分。縦17・2㎝×横10・8㎝。かすかに空押しの界線・罫線（『名葉集』言うところの「白卦」）が視認できる。料紙左下に手擦れの痕があるので、典籍時、見開きの状態では左面に位置しており、すなわちとある1丁のオモテ面だったと分かる。なお本文は、『師輔集』伝本中のいわゆる甲類における32番歌から始まり、「なみ立はしたのみとりにえた／わかすかさしつゝよをたれと」と、33番歌の第5句途中で終わっている。同類に属する烏丸光広筆本などから推定すると、その末尾は「（たれと）かはみむ」となっていたはずである。

一方、**新収手鑑にも、同じ春日切『師輔集』断簡が貼付**されている（②とする）。こちらは縦17・0㎝×横12・1㎝。ここで注目されるのは、断簡Bの本文1行目が「かはみむ」となっている点である。かつその次に記されているのが34番歌でもあるという点、②はまさしく①の本文末尾に直結する、33番歌第5句の末尾4文字に違いなかろう。すなわち手鑑所収断簡は、典籍時、①に連続する1葉だったとみられるわけである。その場合、①はとある1丁のオモテ面だったから、②はそのウラ面だったということになる。②に空押しの界罫の痕跡が見出せないのも、それが①の方側からのみ押されたためであったのだろう。

数百年もの間、離ればなれになっていたオモテ面とウラ面とが、このたび本学図書館において再会し得たという奇縁、古筆切の伝来の不思議さと面白さを思わずにはいられない。

13　藤原定家筆　大記録切　『明月記』断簡　鎌倉時代写　軸装1幅

藤原定家の日記『明月記』自筆原本の断簡。『増補新撰古筆名葉集』「京極黄門定家卿」の項に「名(ママ)月記切　紙立一尺許、杉原・鳥ノ子等不定、俗に大記録切トス」とある名物切。本学図書館はほかに2葉所蔵している。

当該断簡は、縦27・8㎝×横14・5㎝。定家52歳、建保元年（1213）5月24日条の一部分。「『明月記』原本及び原本断簡一覧」（『明月記研究提要』所収、2006年、八木書店）によれば、当該断簡の前後に直続・近接するようなツレは、いまだ見出されていないようである。国書刊行会本では「女房所参」とある箇所が「女房可参」となっているなど、同本の本文を訂正し得る点でも貴重。なお6行目の「誰人聟君」の「聟」など、別墨でなぞり書きしたような痕跡が認められる。同行末尾の「入陶朱之撰」など墨色が異なって見えるところも散見される。

一方、**新収手鑑にも、おそらくは定家自筆とみてよい枡形本の断簡が貼付**されている。縦14・5㎝×横14・6㎝。『増補新撰古筆名葉集』に「同（名月記切）　紙立五寸許、紙同上、俗二小記録切ト云」とある小記録切に該当しよう。『古筆名葉集』はこれも『明月記』と認めているが、小記録切は源師時の日記『長秋記』と、それとはまったく別種の、朝儀に関する故実や作法等を記した各種次第書とに大別されるようである。林田定男氏「藤原定家筆「小記録切」について」（『国文学（関西大学）』92、2008年）参照。当該断簡は後者に属する一種であろう。内容未精査。

14　伝二条為氏筆　『家隆卿集』断簡　鎌倉時代中期写　マクリ1葉＊

藤原家隆の家集『家隆卿集』（また『壬二集』『玉吟集』とも）の断簡。縦20・0㎝×横9・0㎝。『新編私家集大成』では1443～1444番歌に該当。極札の類は付属しないが、『古筆学大成20』所収「伝二条為氏筆　玉吟集切」1葉（1597～1598番歌に該当）のツレにして、『家隆卿集』現存最古写本たる宮内庁書陵部蔵三帖本のうち、中帖に存する欠落丁そのもの、という重要資料。換言すれば、当該断簡は書陵部本のツレ

であり、これによって同本の欠落部分をわずかながらも復元し得る、ということである。

一方、**新収手鑑にも**、「為氏卿（「了佐」印）」という古筆本家初代了佐の極札を伴った、**『家隆卿集』断簡のツレ1葉が貼付**されている。縦22・4㎝×横14・9㎝の藍紙。1637～1639番歌に該当。すでに『古筆学大成22』に掲載されてもいるものの、「伝二条為氏筆　西園寺三十首切」と分類され、『家隆卿集』断簡のツレであることは見落とされていた。が、やはり書陵部本の欠落部分の断簡とみて間違いないものである。久保木秀夫「古筆切・残欠本・転写本―平安・鎌倉私家集いくつか―」（『ÉTUDES JAPONAISES,TEXTES ET CONTEXTES』所収、2011年、コレージュ・ド・フランス。ただしフランス語訳版のみ）参照のこと。

15　伝飛鳥井雅康筆　『新勅撰集』　室町時代後期写　列帖装2帖

黒漆塗り二重箱入（内箱は金蒔絵）。縦25・6㎝×横17・3㎝、深緑地金襴唐花唐草文様織り出しの後補表紙左肩に、「新勅撰和哥集　上（下）」と墨書した雲紙金泥霞引の後補題簽貼付。

本文は撰集過程における除棄歌9首を一切含まない精撰本。精撰本諸本について論じた酒井茂幸氏「『新勅撰和歌集』伝本考」（『国語国文』82-2、2013年）では取り上げられなかった1本である。上帖末に「本書云／眼盲手疼、雖非右筆之器、依假撰者之名字、欲備後輩之證本而已」という本奥書がある。撰者たる定家によるものであろうか。また下帖末には「這新勅撰和歌集者、吾先雅康卿之真蹟、不容疑異者也、応或人之需、加一語、于後云／宝永三年（1706）十一月下旬　雅豊」という飛鳥井雅豊（1664～1712）の識語があり、これによって当該本は飛鳥井雅康（1436～1509）筆とされている。雅豊の識語を除き全文一筆。なお「新勅撰集／全部弐冊／雅康卿筆／黄金弐拾枚」とする宝永3年（雅豊の加筆と同年である）古筆別家3代了仲の折紙も付属。

一方、**新収手鑑には雅康の法名「宋世」署名入りの短冊1枚が貼付**されている。縦34・5㎝×横5・2㎝。天藍地紫内曇料紙。天に保存時の綴じ穴痕あり。「秋夕／うき事の限をしらぬ身なりせは／たへさらましや秋のゆふ暮　宋世」。さて伝雅康筆の『新勅撰集』と、果たして同筆か別筆か？

16　伝飛鳥井雅俊筆　『伊勢物語』　室町時代後期写　列帖装１帖

黒漆塗り箱入り。蓋裏に「正筆尤出来にて候／一飛鳥井雅俊卿伊勢物語一冊／墨附百五丁」という正筆箋が貼付されており、飛鳥井雅俊（1462～1523）が伝称筆者となっている。縦14・2㎝×横15・3㎝、金茶地に金襴唐草文様織り出しの後補表紙中央に、「伊勢物語」と墨書（本文とは別筆）した金砂子散らし題簽貼付。

本文は百二十五段本。1面8行書き。全7括り。錯簡少々。また最終丁オモテ面では、2～3行目に「つゐにゆく～」の最終歌が書写されており、以下余白となっている、ように見えるが、3行目の直後に別の料紙（ただし本文料紙と同種）を呼び継ぎした痕跡があり、呼び継ぎされた料紙のそのウラ面には、業平の略伝が書写されている。当該本の列帖装の括りの料紙構成から、現状の最終丁のあとになお4丁分、本来はあったと推察され（うち少なくとも2丁分については切り取りの痕跡もあり）、そこに業平の略伝なりがあったのだろう。あるいは本奥書や書写奥書、識語も存していたのかもしれないが、現状それらは見出し得ない。

一方、**新収手鑑には雅俊署名入りの短冊2枚が貼付**されている。①縦35・5㎝×横5・3㎝。藍雲紙。天に保存時の綴じ穴痕あり。「七夕／なへて世のたくひにそ思ふ七夕の／中にはうとき契ならしを　雅俊」。②縦35・4㎝×横5・1㎝。金泥霞草花文様描の藍雲紙。「恋雲／へたて行心の雲や我袖に／身をしる雨と成てふるらむ　雅俊」。その上からさらに銀泥葉文様描。前掲の雅康の場合と同様、伝雅俊筆『伊勢物語』と、あるいは短冊同士とで、筆蹟は同一か、如何？

17　上杉鷹山手沢　『新古今集』　室町時代中期写　袋綴４冊
18　伝下冷泉持為筆　『新古今集』　室町時代後期写　巻子本２軸

新収手鑑には伝寂蓮筆の歌集断簡が貼付されている。鎌倉時代初期写。元巻子本、縦28・2㎝×横14・0㎝。大変贅沢に料紙を使い、行間を広く取り、藤原隆方の歌1首、及び次の歌に属する「題不知」という都合4行分を謹直に書写している。その寸法・書式・筆蹟などから、当該断簡は『古筆学大成』所収「伝寂蓮筆　新古今和歌集切（二）」のツレとみて間違いないものである。

この伝寂蓮筆『新古今集』巻子本切（と仮に呼ぶ）については、現在8葉を確認し得ている。いずれも巻十一・恋一に所属。ところが当該断簡は、『新古今集』のいずれの巻にも見出せない。また複雑な編纂過程の途中で切り出されたとされる異本歌（切り出し歌とも）の、現時点で知られている30首前後の中にも含まれていない。しかし前述のとおり、当該断簡が巻子本切のツレであることは確実である。以上を考え合わせれば、要するに当該断簡は、おそらくはかつて『新古今集』の巻十一に入集しており、その後切り出されることとなった、従来まったく知られていなかった異本歌なのだと推断されよう。『新古今集』異本歌の新出は、ここ数十年近く、報告されていなかったかと思われるので、たった1首ではあるけれども、極めて貴重な発見であると言えよう。

さらに言えば、巻子本切のツレ1葉の料紙について、ちょうど池田和臣氏・小田寛貴氏が近時、炭素14年代測定法による制作年代の測定を行っている。結果、1148～1213年の「範囲に実年代がある」こと、それは「新古今集竟宴本成立の元久二年（一二〇五）を誤差範囲の下限近くに含み込んでいる」ものであること、などが明らかとなった。これは「驚くべき値」であり、「竟宴本成立直後の書写本」にして現存「最古級のもの」、しかも「縦三〇センチに近い大型の巻子本ということを考え合わせるなら、特別な清書本であったことが推測される」と指摘されている。両氏「古筆切の年代測定Ⅳ」（『中央大学文学部紀要　言語・文学・文化』109、2012年）参照のこと。

確かに当該断簡に関しては、元巻子本で、鎌倉時代初期頃の写、かつ非常にゆったりとした書式から、特別な写本であるらしきことは容易に推察され、しかもその料紙の制作年代も確かに古いという上掲両氏の指摘を考慮に入れるのであれば、この巻子本切は『新古今集』の竟宴本に極めて近い1本だったか、あるいは、さらに言ってしまえばもしかすると、竟宴本そのものだった可能性もあるのではなかろうか、などとも想像したくなってくる。その場合、現状他本には見出し得ない当該断簡の記載歌は、少なくとも竟宴の時点では、『新古今集』に入集していた、まさしく『新古今集』成立最初期の1首だったということになろう。

前置きが長くなったが、この伝寂蓮筆『新古今集』断簡の縁で、本学図書館蔵『新古今集』伝本のうち、異本歌（切り出し歌）を有するものを2点陳列することとした。

ひとつは17。伝称筆者未詳、室町時代中期写の袋綴4冊本。縦28・3㎝×横20・2㎝。原表紙の右肩に「新古今和謌集巻第一（六・十一・十六）」と打付書き、その上に後補表紙を被せて「古写新古今和歌集　春（～冬）」と墨書した題簽貼付。補修あり。各冊墨付第1丁オモテ面右下に「稽古堂蔵書」「伊佐早兼／古書之宝」の朱方印あり。また帙見返しに「新古今和歌集　全四冊／右　鷹山公御手沢本也、毎巻有稽古堂蔵書之御朱印、可謹蔵／大正四年乙卯秋九月　伊佐早謙謹識」とあり、江戸時代中期の米沢藩主にして名君の誉れ高い上杉鷹山、及び古典籍・古文書の蒐集家にして郷土史家、米沢図書館長をも務めた伊佐早謙（1930没）の旧蔵書だったと知られる。なおより詳しい書誌・考証は『和歌と物語―鶴見大学図書館蔵貴重書80撰―』（2004年、鶴見大学）参照。

当該本には異本歌が8首が記載されている。具体的には次のとおり。

①巻二・春下・110「はる雨は」と111「花のかに」の間、「中納言家持／ふる郷に花はちりつゝみよしのゝ山のさくらはまたさかすけり」。

②同・146「おしめとも」と「147「よし野山」の間、「太神宮に百首哥たてまつりし時／太上天皇／いかにせんよにふるなかめ柴のとにうつろふ花の春のくれかた」。

③巻三・夏・212「あり明の」と213「過にけり」の間、「顕昭法師／ほとゝきすむかしをかけてしのへとや老のね覚に一こゑそ鳴」。

④同・237「五月雨の雲まの月の」と238「たれかまた」の間、「題しらす　赤染衛門／五月雨の空たにすめる月かけに涙の雨ははるゝまもなし」。

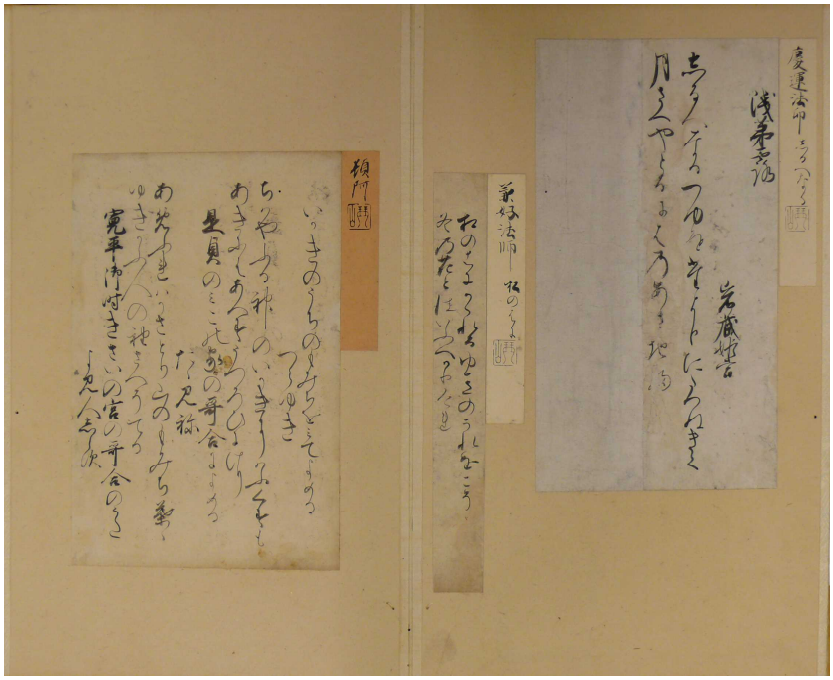
⑤同・244「ほとゝきすはなたちはなの香をとめて」と245「橘の」の間、「増基法師／時鳥はなたちはなのかはゝかりになくやむかしのなこりなるらん」。

⑥巻四・秋上・298「昨日まて」と299「おしなへて」の間、「太神宮にたてまつりし秋の哥の中に／太上天皇／朝露の(ママ)かやはら山風にみたれてものは秋そかなしき」。

⑦同・313「このゆふへ」と314「としをへて」の間、「宇治前関白太政大臣／契けん程はしらねと七夕のたえせぬけふのあまの川風」。

⑧巻五・秋下・441「つまこふる」と442「み山辺の」の間、「恵慶法師／高砂のおのへにたてるしかの音にことのほかにもぬるゝ袖かな」。

もうひとつは18。下冷泉持為を伝称筆者とする極札2点が付属。元列帖装の残欠本を巻子本2軸に改装したもの。列帖装時の1面は縦24・4㎝×横16・2㎝ほど。第1軸は巻16・雑上の途中から巻17・雑中の巻末までで、1459～1462・（この間誤脱か）・1464～1552・1562～1689番歌。また第2軸は巻18・雑下の巻頭から巻19・神祇の巻末までで、1690～1846・1856～1863・1847～1855・1864～1909詞・（この間誤脱か）・1910歌～1915番歌、のように、まま脱落・錯簡が見出される。うち巻十七・1605「いまさらに」と1606「大よとの」の間に存する「題しらす　貫之／いく代へしいそへの松そむかしより立よるなみのかすはしるらん」という1首が異本歌である。『新編国歌大観』底本たる谷山茂旧蔵本など、いくつかの伝本にいわゆる「後出歌」注記によれば、「入拾遺集之由、権中納言源朝臣申之」という理由により、切り出された由である。



参考図版：伝慶運筆　松梅院切『続三百三十三首和歌（中院亭千首題）』断簡（右）など